

JICA シニアボランティア 千葉

SVニュース千葉 第25号

2016年9月14日発行

千葉県JICAシニアボランティアの会
Info.chibajicasvob@gmail.com

本号目次

通常総会 新会長ご挨拶	1
公開講演会	2
帰国報告会	3
出前講座	4-5
任国事情	6-7
フェスティバル 県庁表敬訪問 ボランティア秋募集	8

第21回 公開講演会・平成28年度 通常総会を開催

5月22日（日）午後1時より新浦安駅前プラザマーレ内、浦安市国際センターで、来賓4名をお迎えして公開講演会と通常総会を開催しました。

第21回の講演会は、菅原ふみさんによるパラグアイの民族楽器アルパの演奏で始まりました。民族衣装姿でアルパ（小型ハーブの様な楽器）の弦を指先で柔らかく奏でられる美しい姿と音色に、11名の一般参加者と29名の会員は魅了され、20分は瞬間に過ぎてしまいました。続いて「アフリカから見た日本」の演題でJICA職員の加藤氏による講演が約1時間ありました（講演要旨は2頁に掲載）。引き続き、平成28年度通常総会が行われました。出席者29名、委任状43名で会員総数100名の72%で総会は成立しました。議案審議では特に第6号の規約の一部改正、第7号の役員人事で活発な意見がありましたが、最終的に1～7号議案までの全てが原案通りに承認され、閉会しました。



パラグアイ民謡の演奏

新会長 ご挨拶

渡邊 要吉

会員の皆様には益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

この度は5月22日の総会で新役員が投票が行われ、6月1日の役員会で新会長に選出されました。当会は発足以来14年を迎え、昨年11月には「青年海外協力隊50周年記念式典」でJICAより表彰を受けた由緒ある会となりました。先輩諸氏のご努力で会員は百名に達し大きな組織となりました。

今年6月30日現在のJICA統計によりますと、これまでのボランティア総数は49,362名で5万人に達する勢いです。シニアボランティアについては、累計5,960名、現在派遣中のボランティアは426名であります。千葉県出身のシニアボランティア経験者総数は派遣先54か国、392名であります。そのうちの100名が当会の会員となっています。日本の海外協力は戦後補償の意味合いから始められたと聞いておりますが、今や世界の各国から感謝される施策となっています。私は中米のエルサルバドルに3年間ほどおりましたが、日本に対する感謝、日本に対する評価が非常に高いものを感じました。私たちはそうした経験を共有し

ている団体であると確信しています。私たちの同僚が各国で活躍し、その国の人々とともに努力し信頼関係が生まれます。そうした経験をもとに帰国談を行い、いろいろな機関や、サークルや学校などに出かけて講演を行います。我々はこの文化を大切に、他の国の助けとなり、一緒に努力して友好関係を深めて行くことこそ、これからの日本の将来を開く最大の道であろうかと思えます。

JICAの施策の深遠なることを考え、ご指導ご鞭撻を仰ぎながら努めてまいりたいと思っております。本会の益々の発展と会員皆様のご健康を祈念しご挨拶といたします。



平成28年度 新役員人事

・会長 渡邊 要吉（船橋市）	・幹事 崎元 雄厚（千葉市）	・幹事 弓 貞子（浦安市）
・副会長 村田 淑子（東京都）	・幹事 高橋 吉男（船橋市）	・幹事 渡辺 章（松戸市）
・事務局長 中井 邦夫（浦安市）	・幹事 花輪 淳二（千葉市）	・会計監査 浦山 和良（市原市）

第21回 公開講演会「アフリカから見た日本」(報告)

JICA上級審議役 加藤正明氏

加藤氏は、JICAに昭和58年入職され、平成10年代よりアフリカ・中近東部門の課長・次長職を経てケニア事務所長職等を歴任され、本年4月よりJICA上級審議役に就任されました。今回はこれらのご経験をもとにお話を頂きました。



日本人のアフリカ理解度は？ということでアフリカの写真(都市部の高層建築物、農村部と生活風景など拾数枚)を見せられ、また、スイカ・オクラ・猫の3枚の写真の共通項は？など問われ(答えはアフリカ原産)、一気にアフリカをイメージする世界へ。同氏は我々が即座に思い浮かべるアフリカの貧困・飢餓・紛争・エイズといったマイナスイメージはある一面であり、1990年代から21世紀に入ってからの経済成長率がアジアに次ぐものであることや、若年層の人口増による市場の拡大など、統計上の数値を示されて「最後のフロンティア・最後の市場」として注目に値することを強調された。

日本から遠いアフリカの国々については、歴史的関係も浅く、観光に行く人も少ない、TVや新聞報道も少なく、貿易関係も多くない等々が起因して大部分の日本人がアフリカについてあまり知らない。一方、アフリカの人達は、日本の優れた商品から日本のことを知り、20世紀後半からは自動車を中心に、もの作りや科学技術における日本の先進性やその基盤となる日本人の勤勉さに対する良いイメージや尊敬の念も持っている。東日本大震災時には、アフリカからも多くの有形無形の支援が届いたのは、いかにアフリカの人たちが日本のことを知り、関心を寄

せ、それまでの日本の支援に感謝しているかを示すものだと話されました。とはいえ日本に対する認知度は、欧米諸国や中国への認知度に比べると、段違いに低い状況にあるのが実情でもあると述べられました。

そこで最後に、無限の可能性があり、最後のフロンティアとして位置づけられるアフリカ諸国と日本が、今後より近い存在となり、より良い信頼関係を築くためにどのようにしたらよいかについて話されました。

世界の多極化が進む中、日本の持つ科学技術や文化など、日本の強みを打ち出して、アフリカを含め世界に貢献していかなければならない。例えば日本がアジア諸国で展開したいいわゆる「カイゼン運動」や「一村一品運動」のような形で、現地の人々とともに考え・発展させ、現地の方々の心を掴んで信頼関係のもとに進めた方式を、アフリカの発展に応用して共存の方向を目指すことは大事なことである。日本のこうした強みを「知」として整理し、発信していくことが、アフリカひいては世界から共感を得、信頼を得、ともに繁栄していくことに繋がるものと確信していますと講演を結ばれた。



約60分のお話でしたが、写真・データなどを使った分かりやすい内容で興味深く聞かせて頂きました。時間の関係で質問の時間が取れなかったのが残念でした。

平成28年4月から7月までに「千葉県JICAシニアボランティアの会」に合計27,636円の寄付が以下の方より寄せられました。御礼申し上げます。

加藤 哲夫氏 武藤 達雄氏 及川 淳一氏 白鳥 貞夫氏 坂出 直哉氏 村田 淑子氏 浦木 仁氏 渡辺 章氏 (日付順)

第21回帰国報告会を開催

7月30日（土）13:30～16:40、第21回帰国報告会を千葉市の幕張ベイタウン・コア音楽ホールで開催しました。幕張での開催は初めてでしたが、一般参加者29名を含めて55名の参加があり、充実した報告会となりました。

報告会は定刻の1時半に弓幹事の司会で開会し、当会渡邊会長の挨拶に続いて、来賓の千葉青年海外協力隊OB会の会長 浜田眞一氏（写真左）のご挨拶をいただき、帰国者の報告に移りました。



各報告の紹介

高瀬 義彦 氏 「太陽電池発電装置開発」

私が赴任したのは、パラグアイ国立アスンシオン大学工学部電力・制御システム研究室で、再生可能エネルギーと電力品質に焦点を当てた研究開発プロジェクトを推進していました。再生可能エネルギーは、近年日本でも話題になることが多く、多様な形での実用化が進んでいる分野です。私にとっては新しい分野の仕事でしたが、話し合いながら私の専門である電子工学の知識を総動員して首尾よく仕事を遂行することができました。

パラグアイは内陸国なので、島国である日本とは自然環境が大きく異なります。私はパラグアイに3年住んで、緑豊かな自然とその環境に適応した野鳥の多さに驚きました。休日や旅行の時に野鳥の写真を撮るのが楽しみでした。その種類はパラグアイだけで100種を越えました（近隣国も含めれば200種を越える）。日本では見ることのできない野鳥が多く、パラグアイの自然の豊かさを感じた充実した3年間でした。



大澤 トシエ 氏 「服飾教育活動」

インドネシア・ジョグジャカルタ国立大学で服飾教育向上のために助言・指導を行いました。

大小13,466もの島から成る多民族多文化のインドネシアは、ムスリムが90%を超えるイスラム教の国である。国民の気質はゆったり・のんびり、しかし「やるべき時はやる」のがインドネシア人です。

赴任地ジョグジャカルタ市は、バティック（ろうけつ染めの布）、ワヤン・クリ（影絵芝居）、ラーマヤナバレエなど伝統的なジャワ文化の中心地である。また、ポロブドゥール寺院遺跡群及びブランパン遺跡群という2つの世界遺産を抱えるインドネシア有数の観光地である一方、市北部に多くの大学を擁する学園都市でもあります。

服飾科の授業見学から活動開始、1) ファッショントレンド調査及び分析、2) 新しい作図法、3) 創造的デザインの訓練法“Fashion Design Problem Solving”という3つの技術移転を活動の中心に据えました。具体的には、参考書“Garment

Design Textbook”シリーズの購入、欧米系ファッション雑誌の定期購入、教師と共に「立体裁断」・「デザインとデザイン画」の2授業を担当しました。さらに デザイン訓練講座“Fashion Design Problem Solving”の開催、色彩とその組合せ “Batik Yukata” の講座開講、新人教師対象に服飾デザインを含む服飾全般のトレーニングを行いました。最後に、JICA支援により購入した7冊を含む39冊の参考書を図書館に寄贈して活動を締めくくりました。



渡辺 章氏 「予防接種アドバイザー活動」

ミクロネシア連邦は人口約11万人、東西の国の長さ3,500kmの4つの州（ヤップ、チューク、ポンペイ、コスラエ州）からなる連邦国家です。600の島から構成されそのうち50～60の島には人が住んでいます。第一次世界大戦後、ドイツから日本に統治権が移り、日本の南洋庁が国際連盟の信託統治領として管理していました。現在は米国との関係が深く、自国通貨はなくアメリカドルが日常通貨として使用されています。国家予算の50%が米国からの支援であり、米国にはビザなしで入国可能です。米軍への志願も可能で、米国の大学への入学も米国市民権者と同様の扱いを受けることができます。電気はあまり普及していませんが、最近はソーラパネル導入でところどころ電気が使用されてきています。日本に来る台風の多くはミクロネシア近辺で発生しています。

ミクロネシア連邦の保健省の予防接種アドバイザーとして2年間活動してきました。生き物であるワクチンの保存管理（2℃から8℃）方法についての指導を行いました。また現地の医療従事者はあまり衛生に関する観念がなかったため、注射針を使い廻しをしない、石鹸で手を洗い清潔に保つなど基本的な事柄の指導も行いました。



出前講座実施報告 (2016年4月～2016年7月)

「バヌアツの素顔と働く女性たち」

4月27日（水） 講師 白鳥 貞夫 会員

習志野市大久保公民館で開かれた世界平和女性連合第3連合会「春の集い」で、37名の参加者を対象に、白鳥貞夫会員が「バヌアツの素顔と働く女性たち」のテーマで出前講座を行いました。

世界平和女性連合は貧困撲滅と女性のエンパワーメントに取り組む国連認定NGOで、地域部会の集いに今回初めて当会に講演の依頼がありました。講師は最貧国でありながら世界で最も幸福度が高いと言われたバヌアツの女性の生命力あふれる生き方を紹介し、経済的には豊かでありながら幸福度では世界で中位とされる日本人の価値観について問いかけました。ま

た、太平洋戦争のガダルカナル戦で日本軍を撃退した米軍の攻撃基地がバヌアツにあったことを戦跡の写真と共に紹介しました。講演後に行われた懇親会では参加者から多くの質問や意見が出され、有意義な時間を共有しました。



「異国に住むと見えてくる日本の文化」

5月19日（木） 講師 坂出 直哉 会員

山武郡横芝光町教育委員会が開催する「横芝光町寿大学」で、62名のシニア参加者を対象に、坂出直哉会員が「異国に住むと見えてくる日本の文化」と題して出前講座を行いました。

講師は冒頭にODAとJICAボランティア活動の概略を紹介し、続いて任国パプアニューギニアの歴史や国情をクイズを交えて説明しました。オーストラリアから独立し現在も元首にエリザベス二世を戴いていること、太平洋戦争で山本五十六が墜死し、漫画家水木しげるが片腕を失った地であること等あまり知られていない事実の紹介しました。治安の悪さの実例やその背景の説明に参加者は引き込まれました。ボランティア活動で従事した医業

品の管理業務では、「管理」という概念が存在しない職場の混乱ぶりを写真で示しました。最後に体験談からテーマを3件提示、参加者が最も興味を示したアパートの契約をめぐるトラブルを紹介して、パプアニューギニアが抱える課題を浮き彫りにしました。



「メキシコとチリの文化の差と日本」

5月26日（木） 講師 浦木 仁 会員

市原市南総公民館で、80名の参加者を対象に、市原市在住の浦木 仁会員が「メキシコとチリの文化の差と日本」と題して出前講座を行いました。

まず、日本とメキシコとの歴史的関連で、400年前に御宿沖で座礁したメキシコ帆船の人々を海女たちが献身的に介抱したエピソードで女性参加者の関心を惹きつけました。一方、チリが日本に譲渡した軍艦エスメラルダ（日本名：和泉）が日清、日露の両戦争で活躍したエピソードで男性参加者の関心を集めました。メキシコでは交通ルール無視が当然で電車やバスの時刻表が無いこと、安全な所以外には行けない事情を紹介しました。チリはメキシコと同じカトリック国でありながら、国民性は日本

と似て交通ルールや時間をキチンと守り、仕事との取り組みも熱心で、中小企業の指導業務も順調に進めることができたと説明しました。両国の催し物や食べ物、飲み物、遺跡の観光紹介を含め、1時間30分の持ち時間キッチリ講演に、好意的なアンケートをいただきました。



「言葉の授業」

6月24日（金） 影山 洵、北垣 勝之、酒井 園彦 会員

千葉市若葉区の千葉県立泉高等学校の1年生を対象に行われた「言葉の授業」に、当会から影山 洵、北垣勝之、酒井園彦の3会員がボランティアとして参加しました。

千葉市生涯学習センター、読売新聞東京本社教育支援部、NPO企業教育研究会の協力で行われ、当会は千葉市生涯学習センターの呼びかけに応じて参加したものです。

この授業は実社会で必要とされる年代や価値観の異なる人々とのコミュニケーション能力の涵養を目的として、生徒が日頃ふれあうことの少ない「大人」にインタビューを行い、その概要をまとめて発表しました。

授業の第1ステージでは、「記者の仕事を知ろう」をテーマに、講師と新聞記者が実際にインタビューがどう行われるのかを説

明し、第2ステージでは生徒がチームに分かれ、各生徒が2分間の持ち時間で参加ボランティアにインタビューを行ないました。初めは要領がつかめず、もじもじする生徒が多かったのですが、夫々のチームがインタビューの概要を記事にまとめ、優秀記事の発表を行って授業を終わりました。

参加した会員にとって生徒は孫の世代の若者であり、人生の先輩として、彼等と知的な会話をどうリードするかの勉強にもなり、有意義な経験になりました。



「ブータンにおける海外ボランティア体験」

7月7日（木） 講師 三輪 達雄 会員

三輪達雄会員が、市原市加茂公民館において、43名（うち女性36名）の参加者を対象に標記のテーマで出前講座を行いました。

ブータンは、人口70万人、面積は九州の1.3倍の山岳を主とする国である。8割以上の国民は農業に従事しており、水力発電による他国への売電と観光を主産業としているが、財政の1/3は外国からの援助による。この国は、GDP(国民総生産)の追求ではなく、自然と共存し、「足るを知る」を理想とする緩やかな経済発展を目標とするGNH（国民総幸福）の追求を国是としている。国民の97%は現状を幸せと感じている。そのユニークな生き方に賛同するファンも少なくない。

講師は、農協での経験を基に、協同組合（B-COOP）の立ち上げ、協同組合連合会の設立、農家の実態調査等を実施した。農産物の販売に当たっては、生産履歴、安全性、付加価値を追求して生産者の顔が見えるように指導した。

ブータンから日本を見ると、いつまでも成長を追い求める日本とは違う別の生き方があることを教えられ、感銘を受けた参加者が少なくなかった。講師は、民族楽器を奏でブータンの国歌を歌って参加者を魅了した。



「海外文化と国際理解」

7月13日（水） 講師 門間 通 会員

旭市海上公民館で、26名（うち女性22名）の参加者を対象に、門間 通 会員が標記の演題で出前講座を行いました。

講師は、8年半にわたる南米3ヶ国での体操指導を行ってきた時の体験をもとに、日本と海外諸国の文化の違いと国際理解について多数の事例を挙げて説明した。

コロンビアでの活動は、10歳前後の女の子達に体操競技を指導した。体操の基礎能力は高いが、競技人口は少ない。コロンビアの人は親日的である。

日本の文化は、独特で、均質、相手を思いやる。一方、外国は格差社会であり、トップに立つ人たちは、頭脳明晰、権力志向で、体力抜群であるが、大半の人は自分たちで判断するこ

とは少ない。

大災害時に見せたように、日本人のエネルギー、規律、姿勢、復興力の強さは外国では考えられない。今後とも日本語と日本の文化を大切にしていきたい。

今迄は、国際舞台で欧米に押されてきたが、これからは日本の出番である。参加者からは、日本と外国の違いを知ることができた。また、日本に生まれてよかったという感想が述べられた。コロンビアの民族衣装は雰囲気盛上げた。



任国事情

現在、派遣中の会員・最近、帰国した会員のホットな現地情報です



ザンビア

ヴィクトリアの滝の街、リビングストーン（ザンビア）の魅力

職種 観光開発 宮崎 征士

アフリカの内陸国、ザンビアと聞いて何を連想しますか？ アフリカ全体の地図を広げても、ここだと指せる人、ましてヤリビングストーンは何処か皆目検討がつかないのが普通ではないでしょうか。

日本のテレビ等での番組やニュース等でアフリカが取り上げられる時、場面は貧困、食料不足、感染症等の話題が強調され、これらが先入観となってアフリカを見がちです。これらは存在するものの、全体ではなく予想外の事も多々あります。例えば、ここリビングストーンは6月から7月は寒く、暖房施設が無いオフィスでコートを着て仕事です。ただ毎朝、日本の秋空に似た空で雨は全く降らなく日中は、逆に暑い時もありますが汗をかくことはありません。

ザンビアは開発途上国の中でも最貧国にランク付けされ、男性の平均寿命が最新の統計で、やっと50歳を超えたとの発表があります。日常生活の便利さも日本と比較すれば各段に低いのは事実です。水不足での停電はその一例です。料理をするにもガスは無く、停電だと食事を用意できないわけですが、こちらの人は心得ていて、計画停電に合わせて生活し、慣れれば慌てることもありません。「リビングストンの魅力は何ですか？」よく聞かれる質問です。観光の魅力はハードとしてのサイトだけではなく、治安の安定や人々のホスピタリティー（旅行者に対しての親近感）、街の雰囲気、それに衛生状態等も加味し総合的に評価されると思っています。

リビングストーンは世界遺産のヴィクトリアの滝があります。旅行好き

な人は誰でも知っていて一度は訪れたいと思っているサイトです。街から約8km、車で30分位の距離にあり、滝の水量が多い2月～5月はオフィスから快晴の青空に入道雲に似た水煙が立ち昇っているのが見えます。しかし魅力は滝だけではありません。それは「人」と自然豊かな落ち着いた「街」です。抽象的ですが日本の田舎と同じく、概して男性も女性も素朴で性格はとて穏やかです。敬虔なクリスチャンのためアルコールやタバコを、たしなまない人が多いです。しかしバーやクラブに行けばビール（小瓶で約100円）をラッパ飲みしながら、男性はカジュアルな格好で、女性は目一杯のドレスアップでアフリカンダンスを踊り続けます。

リビングストンの「街」の中心はヴィクトリアの滝に行く大きな道路の両側にお店や事務所が集中しています。この大通りは常に清掃されています。街は小さいけれど昔、北ローデシアの首都だけあり歴史を感じ落ち着いていて、気が休まる場所です。また滝方向に車で14～15分も走れば象やキリンに遭遇することもあります。観光客用のロッジはザンベジ川沿いにあり、その周辺には各種のアクティビティ設備が取り揃っています。

ヴィクトリア滝にかかる虹、特に満月の夜と前後にだけのルナレインボウ（夜、滝に月明かりで虹が現れる）やザンベジ川から眺めるサンセット等は感動ものです。



ザンベジ川のサンセット



ヴィクトリアの滝



ペルー

ペルーに生活してみても

職種 日本語教育 佐々木英夫

ペルーはちょうど日本の真裏に位置するところにあります。ペルーといえば、マチュピチュの遺跡やナスカの地上絵を思い浮かべる方も多いと思います。そしてアンデスのイメージが強いかもしれませんが、私の住んでいる首都リマは太平洋に面した都市です。このようにペルーは地理的に変化に富んでおり、コスタと呼ばれる沿岸の砂漠地帯が国土の12%、シエラとよばれるアンデス山脈の高地が28%、アマゾン川流域のセルバと呼ばれるジャングル地帯が60%であり、ペルー国内にいながら、様々な景色を楽しむことができます。

私の赴任先は、ペルー日系人協会日本語普及部というところで、ペルー全土の日本語教育の普及と質の向上を担当する部署で

す。具体的な仕事としては、日本語教師養成講座の企画運営、現役の日本語教師に対するセミナー講演会の実施、地方の日本語教育の調査及び日本語教育関係者に対するセミナーの実施などを行なっています。

ブラジルでは大きな日系社会が存在することもあり、日本語教育が比較的盛んなのですが、その他の南米諸国は日本から遠いことあると思いますが、日本語教育のレベルがまだまだ低く、多くの問題を抱えています。そのため、南米スペイン語圏の日本語教育の代表者にペルーに集まってもらい、日本語教育の問題点を共有し、連携を強くしようという目的の下、国際会議を毎年10月に行っていますが、その主催も私の所属部署が行なっています。

ペルーは、日本人にとっても住みやすい国だとよく耳にします。まず、第一に食事が美味しいということでしょうか。日本人の口に合うのかもしれませんが、ペルーの代表的な料理にセービーチェというものがあります。生の海産物をレモンでめたものですが、日本人にとっては、刺身のアレンジのような感じで、身近なものに感じます。また、

他の中南米諸国に比べれば犯罪率も低く、安全だというイメージもあるかもしれません。私は、リマの中心地で職場から歩いて2分ぐらいのところに住んでいるのですが、その2分の距離で、先週、夕方職場から帰宅途中、バイクに乗った2人組に、けん銃を突きつけられて所持品を根こそぎ持っていかれたことがありました。

こんなことに遭遇することもあるのですが、同僚達も明るく仕事熱心で楽しい雰囲気の中、毎日仕事をする事ができています。また、時々旅行にも出かけますが、少し移動しただけで、南国の海の景色や、果てしなく続く砂漠、山々に暮らす人々、陸路では行けないジャ

ングルの町など、様々な顔を見せてくれるペルーを大変気に入っています。そして何よりも、とても美味しいペルー料理。これからもペルーの生活を満喫したいと思います。ぜひ、皆さんもペルーに遊びにいらしてください。



日本語教育担当の仲間たち

だけに、タクシー強盗には注意が必要です。

2. メキシコでの異文化体験

メキシコでの異文化は楽しいものばかりではなく、感心した事、“何か変だ”と思う事、時には腹がたつなどイライラする事もありました。

・感心した事

タイで走る地下鉄及びバスは急ブレーキが良く効き、立っていると怪我をしやすい。若い人が地下鉄、バス内で老人に積極的に席を譲っていた親切心。何かの時に発せられる気持ち良い「グアシア」という感謝の言葉。咳やくしゃみをした時、周りの人が自然に「ル」と声をかける親しさ。銀行前で長蛇の列で長時間辛抱強く順番を待つ忍耐強さ。1時間以上も待っていた。

・何か変だよ

アパート内での大音響の音楽。他人へ迷惑の意識がまったくなく、音楽は無礼講らしい。会議時に席を外す時、アリタ(直ぐに)又はシヨミオス(5分)と言い、しばらく戻ってこない。これは席を外す時の決まり文句でしばらく戻らなくても許されるらしい。打合せ時間に大幅に遅れても、約束を無視しても、悪びれることなく、言い訳や詫びは一切ない。問題ない行為らしい。何か頼むと嫌とは言わず快く受けてくれるが約束がお流れになり、約束した本人は何事もなく振る舞う。すぐに忘れてしまうらしい。インターネットの接続が悪く修理を依頼した時、指定された日や時刻になんの連絡もなしにキャンセルされる事が多々あった。これは日常茶飯事らしい。道を道路で尋ねた時にとんでもない方向を示される場合がある。“知らない”と答えるのは不親切と思いましたが、親切心が結果的にウソになっただけらしい。

・合理的？

町を歩いてビックリするのは歩行者の交通信号無視だが車も時々信号を無視する。車優先社会のこの国では交通信号を信頼するより、自分の身は自分で守るために、自分の目で安全を確認して横断の方が安全です。もちろん交通量が多い道路では信号を守っています。

以上、さまざまなメキシコの異文化を体験しました。“何か変だよ”とメキシコ人に伝えても、現地の人達は“善い、悪い”の意識を持たずに生活習慣として無意識に行っていました。文化を変えることは容易ではありません。異文化を知り、理解し、日本の文化を強制することなく接することが国際交流で大切であろうと思います。



メキシコ

メキシコシティと異文化体験
職種 適正製造基準 黒須英典

1. メキシコシティ

メキシコシティは中央高原地帯の標高2,250mの外輪山に囲まれた盆地にあり、人口880万人(近郊都市圏人口約2,000万人)のメキシコ最大の都市です。メキシコシティの陽ざしは強く、朝晩は1年を通じて肌寒く、1~2月になると1日で四季を感じる日もあります。しかし、昼間の暖かさや低湿度で日本の梅雨時のじめじめ感はなく、一年を通して住みやすい場所でした。雨期は天気どころどころ変化します。あるメキシコ人はこの状態をメキシコ人の気持ちと同じだと言っていました。

メキシコシティは1519年にエルナン・コルテスが率いるスペイン軍がテスココ湖上に築かれたアステカ帝国のテチテイトランと呼ばれた都市を征服し、湖が埋め立てられてきた都市です。埋め立て後に建てられたアタール・ペ寺院やスペイン風の建物等で傾いているものを各地で見ることが出来ます。当



1519年当時のメキシコシティの地図

時のアステカの都市の施設は破壊され、その石材等でアステカの遺跡の上にスペイン風の市街地が構築されました。発掘されたアステカの神殿の跡はテンプルマヨール、三文化広場等に遺跡として残されています。

メキシコシティ市内にはリカの寺院、独立記念塔UNAMの壁画、グアタール・ペ寺院、コアカンの対米戦争や革命時の遺品展示博物館、発掘遺跡を展示した国立人類博物館等の多くの観光スポットがあり、郊外に紀元前3世紀頃の古代遺跡ティヘリカがあります。共通のアメリカン・ドリームで乗れる東西南北に張り巡らされた地下鉄とメトロバスで、市内各地へ安く、安全に気軽に行く事が出来ます。顔写真を後部席の窓に貼り、安全を強調しているタクシーを多く見かけます。それ

フェスティバル 地域の国際交流フェスティバル参加のレポートです

浦安市国際交流・協力フェスティバル2016 2016年5月8日（日） 於：新浦安駅前広場

当日は好天に恵まれ、10時から16時まで、新浦安駅前広場は賑わいを見せました。今回は、浦安市の市制施行35周年を記念した行事で、アジア系だけでなく、明らかに外国籍とわかる方たちも数多く来場されました。当会のブースでは国際クイズ（スタンプ・ラリー）、パネル展示、JICAシニア海外ボランティアの応募書類の配布およびシニア海外ボランティア活動に関する相談を行いました。



国際フェスタCHIBA 2016年5月29日（日） 於：神田外語大学

千葉県内27の国際交流・協力団体が活動紹介や物品販売を行う国際フェスタCHIBAが今年も神田外語大学で行われました。民族音楽演奏や発展途上国の社会問題のプレゼンテーション、日本人＆外国人によるアマチュア落語など盛りだくさんで、屋外では恒例の幕張チャリティ・フリーマーケットも開催されました。来場者は主催者調べで1,350人。当会から新旧5役員が参加し国際クイズやスタンプラリーなど、来場者の応対をしました。



JICAシニア海外ボランティア千葉県庁表敬訪問

6月24日（金）、県在住の青年海外協力隊、シニア海外ボランティアの帰国者4名、派遣予定者14名が平成28年度第1回目の県庁表敬訪問を行いました。JICA東京の岩谷寛次長から、文化や言葉、風習の違う環境での活動に対してねぎらいの挨拶、また諸橋県副知事より激励の祝辞があり、それに対して帰国・派遣それぞれの代表が挨拶を述べました。派遣予定シニア海外ボランティアは今回ウルグアイの一人だけですが、青年海外協力隊としてコロンビアに行った経験もある方で、信頼の絆を深めてきたいと話されていました。



JICAシニア海外ボランティア秋募集説明会

シニア海外ボランティアおよび青年海外協力隊の秋募集が9月30日（金）から11月4日（金）まで行われます。千葉県内では、右記の通り募集説明会（体験談＆説明会）を開催いたします。会場ではボランティア経験者による個別相談もあります。両日ともシニア海外ボランティアと青年海外協力隊との合同説明会です。申し込みは不要ですので、興味のある方は直接会場にお越しください。

JICAシニア海外ボランティア秋募集説明会：

- 10月6日（木） 19：00～21：00
船橋市勤労市民センター ホール
（JR総武線「船橋駅」より徒歩5分）
 - 10月20日（木） 19：00～21：00
千葉市文化センター セミナー室
（JR総武線「千葉駅」より徒歩10分）
（京成千葉線「千葉中央駅」より徒歩10分）
（千葉都市モノレール「葭川公園駅」より徒歩3分）
- * いずれも参加費無料、入退場自由です。